5　明治維新という激動の時代、老舗味淋(みりん)醸造を全国一に

石川八郎治(さんぺき)(三碧)
(1844～1923／大浜)

1　石川八郎右衛門家第八代として誕生

石川八郎治（三碧）は、天保15年（1844）、九重味淋で有名な石川八郎右衛門家の第八代（和泉の石川信英・のぶふさを石川八郎右衛門家の初代として考えると八代目。和泉村の石川家から数えると信英は十八代だから、八郎治は第二十五代当主となる）として生まれた。

大浜の産業発展の歴史は、港と廻船、そして製塩と醸造などが中心であった。石川家は、そこで代々庄屋・名主を務め、これらの産業の中心を担ってきた。

三碧（ここでは以下明治40年改名の「三碧」名を使う）は、幼名「吉次郎」といい、慶応4年（1868）に25歳で家督を継ぎ、「八郎右衛門」を襲名したが、その2年後「八郎治」と改名した。明治維新を迎え、三碧の気概を感じさせる出来事である。（その後2代は「八郎治」を襲名したが、十一代の現 社長は4代前の「八郎右衛門」を襲名し、人々を驚かせた）

2　8歳で茶席を設ける

嘉永5年（1852）、三碧（この当時は吉次郎）は8歳のとき、宝珠院に「登山（とうざん・修行・修学のため寺に入ること）」した。その後に諸種の学識と共に茶の湯の作法も身に付けていった。安政4年（1857）には三碧が茶席を設けた記録が残っている。

父も同席する中、茶宴中に交わされた話題には、時流や施策などに関する最新または裏情報などもあったことと想像される。三碧にとっては、教養を身に付けることと同時に人との交わりや会話の術を得る重要な機会になった。

3　「学校掛」「学校取締」など教育関係の公職を務めた

三碧は本業である九重味淋の仕事の他に、重要な公職に任命・選任された。三碧が、ちょうど明治維新を迎えた頃、明治新政府は廃藩置県後の三大重要政策、「徴兵令」と「学制」と「地租改正」を打ち出した。そして青年三碧は「徴兵令」を除く二つの制度に深く係わっていった。

「学制」は、明治5年（1872）8月3日頒布の制度である。三碧はその2年前に「学校掛」「学校取締」になっていた。それまでは「御用達肝煎（ごようたしきもいり・名主、庄屋の異称）」であった。明治4年（1871）7月14日廃藩置県の詔書が下り、菊間県は11月15日に額田県となり、翌明治5年、額田県が愛知県に併合されるなど、時代は目まぐるしく変わっていった。

4　いろいろな議員に選出され活躍する

議員職としては、三碧は延べ7回選ばれた。石川家は従来名主・庄屋職（明治5年4月に廃止）であったわけだから、議員に選出されるのは当然であったかもしれない。ただ、新しい時代になり、「民意によって選出される」という事実は重要で、三碧自身選出された役職を断ることはなかった。そしてこれらの議員職は、あくまで「地租改正」をするためのものであったと思われる。

ちなみに県会議員の選挙権は、地租5円以上を納めることが条件であったから人口の4～5％でしかなかった。被選挙権にいたっては、地租10円以上だったから、1町5反以上の地主に限られていた。

5　地租改正の総代になり、経営感覚を磨く

三碧は明治 8 年（1875）に愛知県から「第九大区郷々地租改正総代」に任命された。地租は明治政府でも主要な収入源で明治 6 年（1873）地租改正条例を布告し「これまでの田畑貢納の法は一切廃止し、土地を調査して地券を渡し、その地価の 3 %を金納する」旨定めた。いずれにしても三碧は、32 ～ 3 歳という壮年に達したばかりの時期に、地租改正という難問に関与したわけだ。ただそのことは、三碧の企業経営感覚にプラスに影響していったことは確かであろう。

明治 12 年（1879）には、大浜村戸長となり、翌年からは県会議員になった。その後大浜村分村問題が起こり、三碧は力を尽くした。明治 19 年（1886）に私立英学会を設立し、その 3 年後には大浜町の学務委員になった。

6　インフレ時には企業規模を縮小し、力を蓄える

明治初年、三碧は多くの公職に尽力していたが、反面本業の九重味淋は、これ以上縮みようのない程に営業規模を小さくしていた。この当時は国立銀行が全国に設立され、紙幣乱発が行われたため、新政府の財政基盤を弱体化させた。また、西南戦争（明治 10 年＜ 1877 ＞ 2 月～ 9 月）の軍費調達を政府紙幣の増発に委ねたこともあり、世間にはインフレの波が押し寄せていた。

このような時期に企業を縮小し、公職に奔走していたことは、かえってその後の九重味淋の急発展の基を作った。三碧の経営手腕のたまものであったとも言えよう。

7　清沢満之とも交流、味醂醸造に専念し経営手腕を発揮

50 歳になった明治 27 年（1894）頃からは、三碧は大浜町以外の政治界の関係を断ち、味淋醸造に専念し出した。そして三碧は汽罐・汽機（ボイラーとスチームエンジン）の導入など経営手腕を発揮し、順調に経営規模を広げていった。

また、隣の西方寺に清沢満之が滞在しているときなどは、互いに行き来した。三碧のほうが 20 歳程歳上ではあったが、東京事情を満之に尋ねたりして新しい情報や学問を学ぼうとした。

明治 42 年（1909）北米シアトルでアラスカユーコン太平洋博覧会が開催され、九重味淋の「九重櫻」が出品されることになり、見事「名誉大賞牌」の栄冠を得て、その名を海外にも知らしめた。

また、同年頃改称された「愛知県碧海郡酒造組合」の組合長にも選出された。当時の味淋生産量は、4 千石の碧海郡が他県などと比較して際立って多かった。その中でも九重味淋は、1 社で千石以上を生産していたという。三碧の最初の内孫に「満千（まち・千に満ちる）」と名づけていたことからも、三碧の喜びが伝わってくる。

8　大正天皇に拝謁、文人としての一面も

60 歳で長子に家督を譲った三碧は、富岡鉄斎（日本近代画壇の巨匠）に絵を学び、明治 40 年（1907）に「三碧」と号した。また、大正 2 年（1913）11 月、尾張・三河において陸軍特別大演習が行われ、日本で初めて飛行機や気球も参加した。そのとき 69 歳の三碧は、実業功労者として、即位間もない大正天皇に拝謁した。

その後も各種の品評会などで、その高品質が認められ「九重櫻」が大賞や優等を取り、宮内省などのお墨付きをもらう中、大正 12 年（1923）4 月 14 日に永眠した。その 4 ヶ月半後に起こる関東大震災を知らずに……。

◆もっと知りたいなら

・『九重味淋 220 年史』（平 9 九重社史編纂会）
・『大濱町誌』（昭 4 石川八郎右衛門編纂）